

ルイ・マラン、『*絵画の記号学*』、篠田 浩一郎&山崎 庸一郎 訳、岩波書店、1986
(Louis Marin, *Études sémiologiques - Écriture, peinture*, Klincksieck, 1971.)

v	まえがき
1	1 問題提起
3	絵画の記号学のための要理 (1968)
42	形象の言説 (1969)
63	2 エクリチュール
65	再現作用としてのテキスト (1970)
101	3 タブローの読解
107	どのようにしてタブローを読むか (1968)
128	クレー、あるいは根源への回帰 (1970)
140	メダルと版画についての覚え書 (1968)
163	4 記号と再現作用
165	フィリップ・ド・シャンパーニュとポール = ロワイヤル (1967)
215	地図とタブロー (1970)
256	パスカルにおけるモデルの概念についての考察 (1966)
281	5 ことばの黄金
283	仙女たち (シャルル・ペロー作: 1697)
286	ペローの昔話、「仙女たち」の構造分析の試み (1969)
315	付 録
319	訳者後記

v	まえがき
vii	研究対象 見うるもの&読みうるもの: 記号世界の二つの領域
	* 見うるもの: 視線に模倣の象徴的分節作用を提供する「芸術作品」 内在的・潜在的「知」による特権を引き出す: 審美力と文化
	* 読みうるもの: 言語活動の諸記号がくり広げられる表面 顕在的「知」を通し、言語活動によるあらゆる理論的手段を動員する
xi	* 西洋芸術の対象を定義する再現作用
	記号表現性の問題には、記号内容と指向対象との二重の問題が関わる
	第1の仮説: タブローの指向対象を記号内容に転換する タブローはその諸形象の内部にタブローそのもの以外の指向対象を持たなくなる
	第2の仮説: 記号内容を、もろもろの記号表現についての言説として

の一覧のうちに溶解する

- xii * 本書の中心：第4部の最初の二編
 17世紀において、西洋の哲学と科学のテキストは、図像的なものと制度的なものとの二重の等価性のうちに、再現作用と記号の諸問題が明白に提起されている
- xiv * 理論的統一性と表題の複数性の疑問
 複数性：表題がどのような認識論に属すかを検討すると数を増した

1 1 問題提起

3 絵画の記号学のための要理（1968）

5 * イエルムスレウによる記号学の定義

「記号学は、第二次体系の資格で研究の対象となった体系である第一次言語活動を引き受ける以上メタ言語であり、その対象である体系は記号学のメタ言語をつうじて意味される。」

記号学的言説が絵画について可能となる

6 * フロイト『メタ心理学』

「対象の意識的再現は、語の再現と事物の再現とに分類される…。」

リオタールの注釈

「言説なるものはいわば、読みうるものと見うるものとのこの二つの軸の分節作用にとどまる」

絵画の記号学の本質的問題：再現作用の直接的で同時に必然的な語彙化現象

* タブローの読解

タブロー：一編の形象的テキストであり、一個の読解の体系である

読む：視線によって図形的総体を一巡することであると同時に、一編のテキストを解読すること

- 8 タブローの視線の統一性：眼の運動によって組織化され構造化された一つの全体

- 9 造形的表面上でのこの視線の巡覧：タブローの場においては、不安定きわまる巡覧

- 10 * : 記号学的研究にとって絵画という対象は、タブローとその読解の分離不可能な総体によって構成され、読解とはおよそ可能な一覧の連鎖しながら開かれた一つの全体として理解される。

- * : 読解の体系としてのタブローは、視線の巡覧の不安定な自由のうちに、多様な段階にわたる拘束を含んでいる

ex. アナロジーによる拘束（眼の錯覚）：類推的体系では大

- 11 * 問題点

: 絵画における二重分節：ラングとパロールの区別：絵画的ランゲージュ：絵画における連辞

これらの疑問についての再検証

* 絵画の連辞

- 13 説話の記号内容によって分節される絵画の連辞的諸単位、すなわち諸形象は、タブローの意味の諸単位となる

絵画の大連辞は言語活動によって中継され、この連辞は表意的総体として分節される

- 14 聖画において：タブローの意味の諸単位は、語りの構造の分析によ

り限定可能となり、形象は説話の記号学者が「機能」と呼ぶものと等価になる

静物画や風景画：説話の構造分析には頼れないが、視覚的実体を分析するために、タブロー内で名づけうるもの（樹木、小川、橋など）の分布状態がある

15 *** 絵画の範列論**

ex. プーサンの作品における《橋》の分析

20 絵画における形態的範列

絵画における記号内容の類推による範列

：E・ウイント『ルネッサンス芸術における異教的秘儀』

絵画、版画、彫刻における「美の三女神」の範列を記号内容の類似と差異に従って研究している

様式とテーマによる二重の範列の方向性が可能か

21 *** 絵画のコード**

知覚作用にもとづく類推的、再現的コード：文化的依存性を含む

初歩的な読解可能性のレベル：読解のコード：書記法 (graphie) の読解に近い：タブローは読まれるのではなく、世界の、または事物の類同物 (analogon) として知覚される

22 知覚的コードの記号学的問題

：フレーゲの意味と指向対象との区別（月と望遠鏡との例）

23 記号はその意味を表現し、その指向対象を指示する

絵画の記号学 は意味の科学である

(la sémiologie picturale est la science du sens)

絵画のイメージが表現するものとは何か？

*** 明示 (dénotation) 含意 (conotation)**

絵画のイメージが形象的記号であるなら、その意味するところは指示的機能のほかに、このイメージが表現的機能を持つということである

含意的体系の分析 H・ダミッシュの雲に関する研究

25 コード：形象的記号の階層の構成原理であり、同時に、範列の変化による階層化そのものこそコードの構成を可能にする

：方法論的循環性：探究の二つの段階

：記号学的段階

形象的記号の潜在的系列の構成が、コード化されたレベルに到達する

：コードの操作的価値に関する検証の段階

範列的系列の示唆的拡がりや認証され、そのコードのうちいくつかの下位コードを、下位階層を区別できるようにする

26 *** 二重の構造**

疑問点：タブローとの関係における諸コードの外在性

ヤコブソンとバンヴェニストによる言語学の二重構造のカテゴリー

27 送り手はコードを用いてメッセージを送り、受け手は送り手の用いたコードを利用することで正確な情報を受け取る

潜在的メッセージおよびコードはコミュニケーションの支えであるが、この二つは二分された在り方で機能する：使用対象

としても指向対象としても扱われる

コードに送り返されるコード、メッセージに送り返されるコードという特異な二つが生じる

*** 固有名詞**

- 28 タブローは固有名詞であり、それ自体しか指示せず、またタブローはコード化された総体であり、その意味を見出すために循環的にコードに送り返されている

*** 指標的象徴**

- 29 ヤコブソンの転移語（シフター：「私」「ここ」「今日」など）との類推から、タブローは指標的象徴 (symbole indiciel) として姿を現わす

タブローは一個のコードに帰着するが、タブロー自体がその固有のコードである

絵画的ラングを絵画的パロールに対立させることは、絵画的ラングがパロールの中にしか存在しないがゆえに不可能である

コードを構成することはできても、そのコードのもろもろの項（形象的記号）は、タブローのメッセージへの指向性によってしか定義されず、それらのコードをタブローのうちに戻すことによってしか定義されない

タブローには世界の客観的指向対象がない：指向されたものは世界の対象ではなく、タブローそのものである

「タブローとは 指向されたもの を絵画的現前そのものとする一個の指向対象であり、 指示されたもの が絵画的現前であり、 指示されたもの もこの現前に含まれるような、 指示するもの である。」

タブローが指標的象徴であるなら、その意味するところは、含意性を作るもの、記号表現が以下のような記号である

：「その内部で 指示されたもの と 指示するもの とが一体となり、また指向対象の現前と、この指向対象を 指向されたもの として含む絵画的現前とが、分節される記号である。」

- 30 *** タブローの読解**

様々な指示子 (indicateur) の現前と、一覧の現前の審級 (instance) 内部から働きかけられている

：産出されつつある絵画的一覧の最初の審級としての画家の指示子

：読解のうちに受容される、一覧の二番目の審級：一覧の現動化の審級としての鑑賞者 = 読者の指示子

：タブローがテキストとして、読解の対象として構成する示された対象の指示子である、空間的で時間的な審級としての指示子
読解の審級が絵画についての言説を現動化できるのは、範列の回り道をつうじてでしかない

*** 置換、圧縮、多元的決定**

- 31 フロイト：夢の内容は夢の思考とは別の諸要素の周囲に配列され、この内容のある種の要素が何度となく同一の思考の中に示され、多元決定されている

上記の過程がタブローを解読しようとする読解のうちにもある

読解の覧がその都度不確実であるのは、それが意味するのは、読解の体系の内部で諸形象がある本質的な不安定性を發揮するから

- 32 * 読解はタブローを意味のパノラマ、意味作用の一覧表とすることはできない
 読解はスタティックではなくダイナミックであり、恒常的で永続的な再合成の諸力の開かれた一体系である
- * 違反
 バルト：連辞と範列、コードとメッセージを対立させる構造的検閲の除去
 マラン：そこに、指標的象徴の概念とタブローの読解についての基本的過程を位置づけた
- 33 * 絵画的意味作用の基本構造
- 34 絵画の内に表意的単位（一次作用）や音素と等価な諸要素（二次作用）はあるか？
 グレマス：対象＝項だけでは意味作用を含まないため、基本的表意単位を求めるのは構造のレベルである
 クレー：
 「点の運動と面の効果との中間にある、媒介的な線。生成しつつあるこれらの形象は線状の性格を持っている。完成されると、この特性は表面のイメージによって一挙に抹殺される。」
 意味の起源：要素のエネルギーによる生成は、意味作用の構造、連続の中での差異を生み出すが、ひとたび達成されると、分節された形相の充実の内にその起源を隠す
- 36 * 線 価値 色彩
 クレーの線、価値、色彩の定義の中には、尺度、密度、質というカテゴリーがある
- 37 絵画の表意作用の基本構造 (structures élémentaires de signification picturale) は、意味的諸カテゴリー、意味論的軸、様々な差異、その差異を結びつける多数の関連からなる複雑な分節された働きの中で可能
 絵画の創造・産出は、対象・形相を構築する
 【 「タブローの指向対象はみずからが産出するタブロー」という主張の理論的裏づけ】
- 39 * 絵画の記号学
 分析的諸レベル、範列的諸領域、諸コードが、それらの内容と同時にそれらの過程について読解されるものとしてのタブローの統一性の中に統合される限りにおいて成立
- 42 形象の言説（1969）
 ジャン = ルイ・シェフェールについて
 【Jean-Louis Schefer, *Scénographie d'un tableau*, Seuil, 1969 (ポルドネー「チェスゲームをする人たち」&カルパッチョ「一万人の殉教者」の読解、タブロー一般の読解理論)を元にしつつ、自説を展開】
- 44 * 絵画の記号学の対象は言説の運動の多様性であり、この運動をつうじてタブローが様々な名で語られ、反復される。また、それらの名の総体は不在の中心を指示する
 タブローについて何一つ語ることはできないが、タブローを語ることしかできない：絵画のメタ言語の構成の問題
- 45 * シェフェールの問題提起
 形象としてのタブローは読解可能か？

- * フロイト『メタ心理学』
 「対象の意識的再現は、語の再現と事物の再現とに分類される…。」
 語ることと見ることとの同時的で複雑な分節
 : 科学的言説の分節 vs 参照的スペクタクルの中での欲望の幻想的分節
 : 参照的スペクタクルが、統辞法的組織化と意味論的分野とを結びつける 形象的模像は無限に多義的となる
- 46 * 一幅のタブローの読解は必然的に、その本性をつうじて、タブロー（一般）の読解理論である
 タブローの意味作用：もろもろのタブローや援用されるテキストがもたらす読解の補足に向けて開かれた空間そのものである
 : 絵画 (peinture) はラングではない
 : タブローは体系的に分析可能である
- * 絵画一般の記号学を作ること、タブローの記号学を作ることからすれば二義的である
- 47 * 絵画 はラングではない
 絵画は言語活動 (langage) のようには機能しない
 言語的モデルを絵画に直截に適用しても期待がはずれる
 「すなわち問題は絵画的言語活動についてただすことでも、言語的モデルの絵画への適用でもなく、タブローについてわたしが語ること的分析し基礎づけること、絵画的空間 (espace pictural) 内でわたしが述べる言説の地位を、タブロー内での読みうるものと見うるものの分節作用を、定義することなのである。」
 何をするか quid facti から、何を判断するか quid juris へ
 絵画の記号学の根拠について、タブロー・読解・テキストの関係についてただすこと
- 48 * タブローは体系的に分析できる
 タブローが分析可能であるのは、その言語学的境界、幾何学的境界によってであり、タブローそのものがその閉域の中で読まれるわけではない
 タブローについて語りうるのは、この開かれている状態のためであり、また、タブローが首尾一貫しない分散状態ではなく、タブロー相互間に一つの定式化しうる認識論的な形象作用 (configuration) があるからである 再現 (représentation) の概念へ
- * タブローが再現するものは、タブローが形象する (figurer) ものではない
 タブローが再現するものは、認識論的空間の再現または形象配置であり、その空間にタブローは開かれ、この空間がタブローの読解を可能にする
 タブローはこの再現 (représentation) の再現的なるもの (le représentant) である
 タブローのもろもろの形象は、タブローの表面においては、この再現の指標のようなものである：その形象は、世界を指示すると同時にタブローが再現的なるものとなる位置された認識論的空間にも向けられる
 イメージという形象のおとりが、タブローの中に再現される知を隠している

- 49 パノフスキーの図像解釈学
 : 解釈すべき対象の内容は象徴的価値で、それは文化的ないし象徴一般の歴史に向けられる: 異なる体系へ
 パースの記号論三角形: 記号の無限連鎖
 : 記号の対象はそれ自体一つの記号である 記号の対象は一つ事物ではなく、この対象を一要素とする象徴構造に向けられる: 多様性へ
- * タブローに顕在的な諸形象の象徴的レベルから、読解のレベルへ
 : 意味の分節作用の問題
 : 切り分けがおこなわれるレベルの問題
- 50 * タブローは事物のイメージとして、諸形象のうちに分節される
 形象相互の関係のうちに、形象を名づける最初のテキストが構成される
 意味の分節は、イメージの構成要素(絵画素 pictème)へと遡及するなかでおこなわれるのではなく、事物のイメージとしてのタブローの表面での命名行為によって成立するが、これは最初のテキストのみに当てはまる
 読解は、タブローのなかに同時に存在し、そこに同時に潜在している他の諸テキストを横切って、次々と形象を通過させる: 同時性の概念
 タブローの読解が諸形象の空間の読解であることを意味する
- 51 * 形象 タブローの分節: この分節は、言説の織物として、テキストのなかで絶えずその位地を変える
 形象は、この置換のなかで、またそれによって意味される
 形象のテキストを横切ってなされるこの置換が形象の構造である
 形象は、タブロー・読解・テキストの関係を象徴する
- * タブローの二重分節らしきもの
 : 形象は、把握あるいは命名された第一次テキスト内で解体されたイメージの内に分節され
 : イメージの意味論的再分節作用の概念が生まれる
- 52 * シェフェールの分析を有効ならしめるもの: 再現の多義性が働くレベル
 : 認識論的価値を持ち、タブローの境界における、空間の認識的外形としての価値を持つレベル
 : 形象配置を指向しているレベル
 : 概念が一般的な方法論の側面に介入するレベル
 意味作用のメカニズムそのもの
 再現とは再現されたものの構成である: 記号内容を記号表現へと送り返す動き
- 53 * イエルムスレウ: 言語活動に関する二つの対立
 : 過程ないしテキスト vs 体系
 対象としてのタブローのなかで、タブローによって提供され、場景として置かれるのは体系である: 体系はテキストの構成要素の目録と書かれた表面上での要素の結合的組織化を提示する
 過程: つまりテキストを虚構として構成するのは、タブローの読解である: 過程はタブローのなかにではなく、タブローの読解のなかにある
- 54 体系の情景化によって形象に暗に含まれるこのになるのは知、テキストの知であり、過程(テキスト)の構成によって知の中に消

えていくのが形象である

タブローを読むということは、記号表現をつうじて記号内容を解読することではなく、その逆のプロセスであり、そこにこそタブローをその境界において読解することの意味がある

われわれは知や認識空間を出発点にして記号内容をある程度持っているため、隠されていると同時に現前しているものは、形象に含まれている知である

中に含まれたもの *implicatio* を外に現われたもの *explicatio* にすることによって、記号的分析は、形象に含まれた知を非内包化 (*désimpliquer*) すると同時に、知のテキストを構成する

分析がタブローの記号表現を構成することになる

その時点で、タブローは形象としては消滅する

- 55 *フロイト：夢の働き
- : 夢のテキストに対し、自己検閲が形象の変化過程を始動させる力として介入する：分析家の仕事はその逆で、夢の形象・内容からテキストへと移行する
 - : 夢の解釈、読解の作業は、夢の思考を形象に圧縮させる変形の過程の性格によって、際限のないものとなる 知の読解の無限化 諸形象は象徴のレベルに位地を占める
- 56 個々の読解、タブローの構成された個々のテキストは総体的に不確定なものになる：諸形象は読解をつうじて形成され、解体し、絶えず再形成される
- 形象は、読解によって構成されることにより本質的に不安定であると同時に、多くの意味を「圧縮」し、意味の結節点となっている 形象がタブローのなかで機能する
- 57 タブローの画面に一つの決定的な形態をその都度記入するのでなければ、形象を生み出すことはできない
- 形象は、幻影現象 (*fantasme*) として、「～として」という語で特徴づけられる新たな隔たりとして機能する
- 幻影現象とは形象的形態であり、この形態の内に欲望が組み込まれる それは欲望が自己に「対象」を与えるための罫であり、もう一つの欲望に他ならず、その中に自己を再現することによって本来の欲望は自己を閉ざす
- 59 *フレーゲ『意味と意義』：月と望遠鏡の例
- 記号とは、意味を表現しながら対象指向性を指示するもの
 - 記号は二重の関係のうちに捉えられるもの
 - ：記号内容のカテゴリー：意味論の分野
 - ：言語活動の外部の世界のとの関係
- 60 *タブローとその表意的置換的要素の表層を乗り越えるには
- タブローに内在化されている知や体系に則してタブローを分節し、テキストを多元的に、記号表現を産出しながら構成していくのが望ましい
- 63 2 エクリチュール
- 65 再現作用としてのテキスト (1970)
- *ピュートル『絵画のなかの言葉』のコメント
 - *イメージ
- 66 見ることのうちに存在する意味：一種の無意味

読むためには見なくてはならないが、それは十分条件ではなく、読むことは見ることを越えている：意味の超過

タブローは読む行為のうちに溶解する

67 タブロー：視覚に与えられる 見つめることの不可能性が与えられる

*文字

読むものをわたしは見ないが、見えるものをわたしは一挙に読む

 読みうるもの における意味の直接性

読むものを見ていないとすると、それを見ているはずがない

見えるが実は見ていなもの：直接的なもの：意味

意味を繋ぎ留めているもの：書かれたもの

読むことと見ることの非対称性

68 文字は形式ではなく、横切られた空間であり、その開放性によって定義される

69 意味は文字のうちに存在し、意味の外側として文字に連なる

 読解行為：文字を見ずしてこれを横切り、文字の可能性のもう一方を収集することに、文字自体の内側でこれを越えてゆくこと

70 タブローのなかにある文字：書かれたものにあって見えないものを見るようにすること

*標題

 エクリチュールの記号は読まれる以前にあるいは同時に見られている：文字はタブローのの体系に結ばれている

72 標題の『春』は固有名詞ではなく、タブローの固有名詞である タブローしか表さない

*名札

74 鑑賞者はタブローを見、周縁に標題を読む 意味の効果を見ること

*署名

 作者の固有名詞としての署名は不在のままに示された固有名詞

76 (標題はタブローを指し示す)

 署名は作者の不在であると同時に、タブローが作者に属することを示す：固有名詞は作者の換喩によってタブローを意味する

77 署名は非固有的である：それを把握できるのはそれが存在しないところである

 署名はタブローを作者に指向させる：その名を単一なものとしてその総体へ帰属させる

79 署名とは作者の墓標であり、作者が不在である場所の眼に見うる指標である

*再現されたもののエクリチュール

 再現作用は反エクリチュールとして与えられる

80 タブローに再現されたエクリチュール：疑似的現前をつうじて二重化された模倣（シミュラクル）であり、その実体のうちに止まっている

81 それは読むべきものではなく、見るべきものとして差し出されている
 タブローに再現された書物は読まれることがない：これは書物であるというサインを送る：認知記号であり、認識の記号ではない

*記号表現

84 タブローは読む行為と見る行為とが同時におこなわれることを欲する：この両行為の異質性が維持され、保持され、絶え間なく還元される

『絵画の記号論』レジュメ

ルイ・マラン、『絵画の記号学』、篠田 浩一郎&山崎 庸一郎 訳、岩波書店、1986
(Louis Marin, *Études sémiologiques - Écriture, peinture*, Klincksieck, 1971.)

v	まえがき
1	1 問題提起
3	絵画の記号学のための要理 (1968)
42	形象の言説 (1969)
63	2 エクリチュール
65	再現作用としてのテキスト (1970)
101	3 タブローの読解
107	どのようにしてタブローを読むか (1968)
128	クレー、あるいは根源への回帰 (1970)
140	メダルと版画についての覚え書 (1968)
163	4 記号と再現作用
165	フィリップ・ド・シャンパーニュとポール = ロワイヤル (1967)
215	地図とタブロー (1970)
256	パスカルにおけるモデルの概念についての考察 (1966)
281	5 ことばの黄金
283	仙女たち (シャルル・ペロー作 : 1697)
286	ペローの昔話、「仙女たち」の構造分析の試み (1969)
315	付 録
319	訳者後記

3 タブローの読解

* タブローは視線の対象であり読解の対象である

 タブローとその形象はすでに言語活動である

 物であるタブローとその形象は言語活動の起源であり、かつ、すでに見られ語られているにもかかわらず事後に起源となる

* 視覚テキスト (タブロー) は、言語作用の文法と統辞法の規則とは別の規則に従っている

 無意識で博識な読解のコード

どのようにしてタブローを読むか (p.107)

* 歴史画【再現の一般的コード；文学テキストが提供する主題と描写の物語の総体からなる「図像学的」指向対象】ではなく、静物画や非具象絵画を扱う

【静物画 (nature morte)】

その沈黙をつうじて絵画の記号学の問題提起：絵画は言語活動か否か

鑑賞者の耳にある種の言説を囁く：ある文化の高度なコードを持ち合わせているものには理解できない

(ex.) フィリップ・ド・シャンパーニュ：『静物画』(p.108)

キリスト教擁護という含意を持った深遠な宗教的言説：死と永遠

(ex.) ボージャン：『巻菓子のある静物』(p.110)

気高く実直で単純なブルジョアの生活と貴族の日常生活の気どった洗練ぶりとの対立

(ex.) シャルダン：『桃とぶどう』(p.112)

シャルダンは自律的な絵画的秩序の深い統一があるということを絵画によって示した存在の豪華さ、光線や反射の豊かさ

逆さまのクリスタルグラス：人間の条件の不幸

* 絵画の記号学 (p.116)

指示されたものの排除：絵画のなかの対象はその対象自体を指示する：純然たる記号表現

その記号内容は、その記号表現そのものである

見えるものが読みうるものになる

言説の大きな表意単位：統辞法ないし慣用語法のレベル

音素に対応し、言語体系の弁別特徴に対応するレベル

(ex.) モンドリアン：樹木のテーマ (p.118-9)

相対する優先的な二つの曲線の重要性：垂直性&水平性

再現というコードから自己を解放 表現のコードへ

『コンポジション No3 (樹木)』(p.122)：到達点

* 再現されたものとしての世界の事物の消滅 (p.123)

* 絵画のラングの定義 (p.123)

* 絵画における意味 (p.123)

造形的諸要素の複雑な体系による記号：対象指向性の喪失によって絵画は見うるものとなる

(ex.) クレー：『都市の書物の一ページ』(なし)

- * タブローの原初的な構成作用：旋律線と平行線：タブローの意味の基本的構造
- * 第二義的な意味作用：諸要素の関係&対立
 - 中立で受動的な表面上での線状の図像的諸記号と、能動的で空間を作り出す諸表面との出会い
- * 意味の第三層：形象的連合作用（クレー）

タブローの読解

相互に分節され階層化された諸コードの複雑で困難な習得

絵画の記号学

絵画の表意作用の一般概念を記述し、創造行為におけるその分節作用のメカニズムを理解し、さらに鑑賞における読解と解読の手続きを理解する

クレー、あるいは根源への回帰 (p.128)

- * パウル・クレー展を「イエナの演説」を用いて解読
- * タブローとデッサン（200/9000点）の提示法は明快であり、年代と主題の論理性も見事に実現された
- * 上記展覧会が暗示する命題
 - クレーあるいは再現の問題設定
 - 「芸術は見うるものを再現するのではない、芸術が見うるものにする」への誤解
 - ：事物の見えにみえない裏側を絵画が眼に見えるものにするという誤解

(ex.) クレー：『アーリマンの視線』(p.131)

生成としての創造の発見：無から生まれた視線が鑑賞者に芸術家の視線を投げ返す

* 再現作用の絵画的分析

分析の実現は絵画のなかにおいてでしかあり得ない

バウハウスでの著書『庭のなかの黒い矢』(1929)を参照 (p.133)

* パンチュール = エクリチュール (p.134)

本源的なものへの回帰は、絵画の文字言語への回帰である

どのようにして文字が消滅し、文字言語としての絵画に席を譲ったか

：『右上にある緑のX』(1915) 『3点八音(C)の様式』(1921)

(ex.) クレー：『魔女のまなざし』(p.136)

* 絵画とはある表面に書かれた様々の記号である

この創造は、もろもろの外観の反映ではなく、一遍のテキストのすでに書かれた文字言語であり、このテキストの終わることのない一瞥が形象を、つまりタブローの表面の幻想を構成する。

メダルと版画についての覚え書き (p.140)

* 記号論的研究の諸要素

* E・ウィントの著作 (Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance*, 1958) についての翻訳メモ

* 寓意画の二つの意味作用

: 思考の単純な模造物である寓意画

観念を図化、思考をイメージ化する：この寓意画は観念が明瞭であれば余計なものであり、観念が複雑なものであればひとを混乱させる

: 思考の象徴的な対位法である説得的な寓意画

「ある思考が複雑ならばその思考を一つのイメージに結びつける必要があり、ある観念が単純ならば、その観念を一枚のデッサンに記入することは有益」

* 「優美の三女神」のテーマをめぐる形象の分析 (p.143)

三位一体：対立するものの統一：総合：「与える・受けとる・返す」など

二人から一人をひく：非左右対称性：起源とリズム

* 判じ絵としての寓意画とメダル

フロイト『夢判断』：圧縮 (p.145) と置換 (p.146)

* メダルまたは寓意画の記号学的分析

メダルや寓意画という対象の意味は、総体的暗号解読によってそれらの対象の外部にしか発見されない：総体的暗号解読は、対象のテキスト的要素と視覚的要素の相互交換的な変形による隠喩的ならびに換喩的諸関連を綿密に探索する限りにおいてのみ可能

(ex.) マテオ・デ・バスティ『ソノトキ何ガアルカ』(p.149)

内容なしの叫びであるが、認知のレベルでは一種のメッセージ(話しかけ機能)

文脈がないため、この定言は一切の意味を失い、記号内容なしの一個の記号表現として機能している

(ex.) ボッチ『象徴的疑問』(p.153)

「言葉は銀なり、しかし沈黙は金なり」：饒舌 vs 省察の沈黙：陳腐な格言：形象を基盤

「単子八独力デ存続スル」：統一体はおのずから保持される：哲学的命題：形象に還元

* 形象：表意全体は両立しがたい記号内容を統合する

ヘルメスは交換と伝達の神でもあり、換喩的隣接性と隠喩的相似性とが形象の多元的に決定された備給のうちに結合される：形象は両立し得ない相反するものを、版画のなかで二つのテキストの占める位地の循環的な動き、意味と価値の動きによってのみ一体化する

* 全般的読解のための最後のステップ

上部：光線と闇：光線中心主義 vs 下部：ことばと沈黙：ロゴス中心主義

版画そのものが、その象徴的、テキスト的諸記号表現が示す事項のうちに、意味を露呈する

* 記号学的作業仮説としての結論：認識論的・機能的・哲学的

4 記号と再現作用

フィリップ・ド・シャンパーニュとポール = ロワイヤル (p.165)

* 言語活動から描く行為へ、見えるものと見えなものの

《ポール = ロワイヤル論理学》の中心：言語活動に対する反省（言説の余白に）

* 言語活動：再現するものとはいかなる見える関係も有しない

* 記号として機能する物：見える関係によってそれが記号となった事物と結ばれている：絵画など
全ての記号における再現的二重性：記号は概念の事物であると同時に事物の概念である

* 言語活動：記号と事物の代入は、事物から記号へ方向 (p.166)

* 絵画：代入は記号から事物へ方向

「絵とはなんとむなしなものだろう。いっこうに感心されない事物をモデルとしてそれを写しとり、似ているからといって感心されるのだから」(p.167)

* 悪しき言語活動

音声的あるいは視覚的質量によって、固有の価値を獲得し、形象や音楽となり、概念から注意をそらし、自律的なものとなった記号：意味の可視性 (p.169)

* 伝記的所与と解釈

フィリップ・ド・シャンパーニュ：演劇や絵画を断罪したポール = ロワイヤルにあってどのような位地づけがなされていたのか？

美学的分析レベル：携帯、様式、主題上の固有のカテゴリーを付与された自律的な全体性として作品を定義

歴史的分析のレベル：伝記的あるいは社会的な隠れた諸事実を通して作品を把握

* 1643-48年頃、ほぼ40才の頃に、シャンパーニュはポール = ロワイヤルと関係を持つ：断絶
芸術的回心を示す (p.174)

* 絵画の正当性について

ブーサン派のフェリピアンによる評価：シャンパーニュは真面目だが天分に欠ける

ロジェ・ド・ピールによる評価：シャンパーニュは善良な画家、出合ったままに自然を模倣する

ポール = ロワイヤルのバルコスによる評価

(ex.) 『エンマウスの晩餐』(p.178) について、ティツィアーノの模写であるとしつつも、両者の共通点を否定

シャンパーニュの改変 (p.180)

：聖体拝領を行なわせるキリストの行為を中心にして統一性を構築

：霊的な意味を変え、一群の教化的表徴の星座を作り出す

画家の行為：神の意思の隠された密かな顕現であると解釈される

バルコスによる絵画の正当性 (p.181)

：芸術は一つの記号であること

：タブローはそれが生きた真実を再現する場合にしか記号とはならない

：絵画は教会の歴史であるところの真理の歴史として解する限りにおいて歴史の絵画でしかありえない

* 古典主義的問題提起。その異議申し立て

人間と自然の再現における真実性の問題の定式化

：歴史・物語に関して、出来事に真実らしさと人間の宣揚という価値を与えつつ表現すべきか？

: 人間に関して、心情と魂の内密な動きをいかに表現すべきか？

: 自然に関して、情景の現実性と現前との再現をいかに成功すべきか？

シャンパーニュの答え

: 聖書の詳細を入念に尊重すること、それは神の記号である

それらの記号のなかに有意的な神の言語活動を解読すること

(ex.) 『聖ジェルヴァジオ、聖プロタジオの遺体の発見』(p.184)

アウグスチヌス『告白』第9巻8章のテキストから着想

& の答は???

*人物の再現の真実性

再現の真実性は真実の正確で瞬間的な再現を含意する 瞬間は、はかないものでありかつ、現前を意味する

心理的表出に関して

* ブーサン：人間の条件に関する哲学的瞑想の素材

* シャンパーニュ：瞑想は、宗教的・神秘的なもの

(ex.) 『シモン家での食事』(p.190)

* ル・ブラン：心理的行為に執着

* シャンパーニュ：存在論的な様々な状態に着目

肖像画

* ル・ブラン：情念の心理的な表出

* ブーサン：人間の条件に関する哲学的瞑想

* シャンパーニュ：人間の存在論的状态に関する宗教的瞑想

*人物と自然の再現

二つの問題

: 感覚的空間と幾何学的空間とをいかに調和させるべきか？

: 自然のなかに人物ないしは歴史的テーマをいかに組み入れるべきか？

シャンパーニュの解決法 (p.191)

: 再現作用の諸要素を再び取り上げながら、それらを全く別の図式のなかで作用させ、別の操作の様態によって再生させつつ、内部からそれらに異議申し立てを行なう

(ex.) 『洗者聖ヨハネ』(p.192)

(ex.) 『十字架上のキリスト』(p.194)

(ex.) 『聖女タイス』(p.196)

(ex.) 『聖ゾジモス』(p.199)

シャンパーニュの風景は、象徴ないしは寓意の集成ではなく、準備なしでそれを読むことのできる霊的瞑想の諸テーマである (p.200)

シャンパーニュの基礎をなす「習態」は、ポール = ロワイヤルのもの：キリスト教中心主義、聖体の重要性、見える諸現実のなかと人間の歴史のなかに現前させている隠れた神

ポール = ロワイヤルの告白

: 人間のモデルはわからない：驚異は記号である：あらゆる事物における神の刻印、呼びかけ, etc.

シャンパーニュは、真に意味でポール = ロワイヤルに属していたが、見かけ上は古典主義にある

(ex.) 『奉納額』(p.189) が頂点

4 記号と再現作用

地図とタブロー 自然記号に関して (p.215)

『ポール＝ロワイヤル論理学』の記号の定義に関する注解と、パスカルの概念との対比

「ある事物を、他の事物を再現するものとしてのみ見做すとき、ひとがその事物についていただく概念は記号の概念であり、最初の事物は記号と呼ばれる。このようなかたちで、ふつう人々は地図やタブローをながめる。」(『論理学あるいは思考術』第一部、第四章、p.55、1683)

自然的記号と制度上の記号(語など)について、第十四章で展開されていることを考察

名辞という記号は、事物の他の名辞を属詞とする一つの命題の主語であることを理解する必要
制度上の記号と対立する自然的記号がポール＝ロワイヤル論者たちの問題提起からはずれたのはなぜか?

カエサルの肖像を見て「これはカエサルだ」と言えるのは、タブローが事物を再現するからで、記号が眼に見える関係を表すからである(p.218)

言語は再現作用を定式化し、翻訳することしかない

事物の非言語的記号と、事物を名づける記号との関係の問題：二重性を有する記号

肖像としてのタブローは隠喩的文彩として機能し、事物とその再現像との間で隔たりを開くが、言語活動のなかではその隔たりがゼロになる：見ること、それは読むことである

鏡のなかの映像

* 鏡なかの映像はその現前のなかにその映像である人間の現前を含んでいるが、肖像や地図はその現前のなかにその再現の不在を含んでいる(p.219)

鏡のなかの映像は、それが再現する人間の自然的記号である

鏡の中に映像があるのは、「彼」は鏡の前にいるが、わたしは彼を見ていないからである：見るものを見ることなく見られるものを見ている(p.221)

地図

* 肖像や地図は、記号の現前が不在のなかで記号で示された事物を示し、再現する

カエサルの肖像はカエサルではない：カエサルは死んでしまっている

肖像や地図の場合も、記号で指示された事物は現前すると同時に不在であるもとのして与えられる(p.222)

パスカルと田園

* パスカルは『パンセ』において、名詞のなかに記号内容の損失を指摘している(p.224)

「都市、田園は、遠くからは一つの都市、一つの田園である。しかしひとが近づくにつれて家、樹木、瓦、木の葉、草、蟻、蟻の脚となり、限りがない。これらすべてのものが田園という名詞のもとに包括されている」(『パンセ』断章113)

名詞は指示されたものを隠蔽する

指示されるものは無限であり、それは差異、不同の無限であって、連続、量の無限ではない
差異はそれを隠蔽する名詞、それ自体も、それなりに他の名詞との差異である名詞の下で増殖する

パスカル的名詞とは、差異の無限を隠蔽する差異である 断章形式へ(p.227)

地図は眼に見える世界の本質的な構造が記載されているが、その記載は細部の消去によってしか獲得されない

とはいえ、地図は、個物としての同一性と、固有名詞（「イタリア」地図など）と、指示子「これは」とのおかげで、あらゆる差異をこえて、そこに回帰する同一物と、この両者の二重の確保となっている（p.228）

ユリウス・カエサルの肖像

* 肖像：人間の形姿（フィギュール）の再現であり、その価値はモデルに似ていること（p.229）

* カエサルの肖像について

その個性、その同一性は、爾後においてしかそのものたり得ない

絵画のなかに現われる人間の形姿は、それらの肖像のなかで、それらの肖像を通じてしか固体としては存在しない：形姿の再現作用のなかでオリジナルが構成されていくのであり、それ以前にオリジナルは存在しない（p.231）

肖像としてのタブローは、それ自体以外の指向対象を有しない（p.232）

皇帝カエサルの肖像

* デューラー作マキシミアン皇帝の肖像

固有名詞「カエサル」は固体には結びつかず、その職務によってしか定義されない

像はある個人の肖像ではなく、一つの力の肖像であり、権勢の華々しさを表す：肖像の本質的機能の一つ（p.233）

固有名詞が主体の外観のもとに隠蔽しているのは、権勢への参加を要請する道具性である：肖像のなかの固有名詞は、再現像を指示すると同時に隠蔽する

パスカルと肖像

* パスカルが考える肖像には、現前と不在、満足と不満という二重の根源的差異に貫かれている：断章494

肖像は現前として不在の様々なしるしをもたらし、不在によってしるしづけられた現前である：肖像は不在の痕跡である（p.237）

記号内容の現前は記号表現のなかでのその不在であり、肖像の表作用は、その不在をもたらし、それを提示することにある：肖像という記号表現は、記号内容の不在として指示されているその不在はそこに見えている

* パスカルにおける暗号について（p.238-242）

* 暗号化された手紙を横取りした人間が読むもの（p.242-244）

* テキスト同様、肖像も暗号である：表徴のなかでのゼロの開示：痕跡として現前しているもの、即ち不在であるものは、人間の形姿である（p.245）

わたしがその絵姿で見ているカエサルをわたしは見えない：わたしが見ているのはカエサルではなく、その絵姿である

シャンパーニュの肖像について

* 肖像は、人間の形姿をそれ固有の個性から解放し、不在のモデルの痕跡としてのタブローのなかに刻印されることによってアイデアになる 死の抑止でありかつ死の指示

モデルのアイデアを痕跡として刻印し、モデルを固体性として死なしめ、再現のなかにオリジナルとして登場する

肖像が固体のオリジナルであって、固体が肖像のオリジナルなのではない (p.246)

ex. シャンパーニュ作『サン＝シランの肖像』 (p.249)

デスマスクから作られた

サン＝シランの奇跡と聖遺物にまつわるエピソード (p.250-252)

有効な記号としての死んだ身体は、聖遺物として解体される：表意作用によって有効な体系として分節された死体、これが義人の死んだ身体であり、肖像である

デスマスクは、死んで、聖遺物として断片化された身体の代わりをつとめる記号表現：その記号内容は、肖像であって死者ではない (p.254)

再現の道具がマスクであり、死者の非分身化された再現を通じての修徳と祈りの道具が肖像である

パスカルにおけるモデルの概念についての考察 (p.256)

『パンセ』の断章931 (快さと美) と932 (詩的な美と幾何学的な美) からモデルの概念を検討し、その諸相を明らかにし、有効範囲を識別し、哲学ないし文学的帰結を引き出すこと

* モデルは、存在のコピーではなく、わたしの性質と事物の関係である (p.257)

* 特定の固体的なそれらの存在は、性質と類を異にしている、比較可能な類似したもので、快の特殊な構造という観点から等価である

一編のソネットは一人の女の装いに等しい (p.259)

* 快の領域の問題であるから、モデルの中には価値を有するものと、そうでないものがある

* パスカルとライプニッツの差異 (p.263)

原罪の秘儀に発する人間の性質の多様性は、哲学的分析では克服できない

ライプニッツのように、理解可能な純利論的法則、神によって計算された法則に従うのではない：それは罪の法則、不整合と絶対的不決定の法則に従う

* 詩的暗語 (jargon poétique) について

暗語とは「小さなことを大きな言語で言い表すこと」 (p.266)

* 幾つかの文彩について (p.268-270)

* 主観性と文体の特性について (p.274)

* あるがままの自然と快く思われる事物の図式 (p.275)

5 ことばの黄金

仙女たち 『過ぎし日の物語、あるいは昔話、ならびに教訓』 (p.283)

童話のテキスト

ペローの昔話、「仙女たち」の構造分析の試み (p.286)

ペローの童話の構造分析

- * 分析はテキストを弁別単位に分節化することから
 - 個々の単位は、さらに大きな単位の構成要素であると同時に、その全体の内部にさらに小さな単位群を統合するものであること (p.287)
 - 下位の単位群は上位の単位にとっては内容でありながら、さらに下位の単位群にとっては形式となっていること
- * 題名は後にくるものを示し、その内容を明らかにし、それとそれが抽出された全体との関係を提示する
 - 「仙女たち」は複数であるが、実際は一人しか登場しない (p.289)
- * 説話と教訓との間の分節化
 - 教訓は説話の意味を与えつつ、再読へと促す
 - 再読：教訓が与えくれるコードに従って説話を解読することを可能にする：説話を読むのではなく翻訳する (p.290)
- * コントの構成図 (p.291)
- * 語り手の介入
 - われわれを讀みの行為のなかに位置づけ、テキストの解釈者として、われわれをテキストのなかに導き入れる：二重のテキストの存在 (p.293)
- * 時間的表現について
 - 断絶がある：半過去と単純過去のとの対立 (p.294)

諸構造 シークェンス

- * 親族の原構造の図式化 (p.296)

方法論に関する横道

- * シークェンスの定義ないし範囲確定の困難さについて (p.297-8)
- * 九つのシークェンスとその構図
 - ：外部と内部との関係 (p.300)
 - ：男性界と女性界との関係 (p.301)
 - ：姉妹と王の息子との相関関係 (p.303)

呼称 試練

- * 説話内での呼称の移行は、登場人物の相互的位地、その相互的關係を決定する (p.308)
- * 試練の図式は呼称の図式の倒立である (p.309)

付録

85 *** モデルの名前**

肖像画とは、絵画の形をとった名前であり、固有名詞の形象の到来を告げる

86 肖像画は、分類的呼称と、変形されたイメージの指示という二つのレベルの性格を帯びる

87 *** 名前の固有性**

肖像画とは、固有名詞の形象の君臨である：固有名詞は意味を欠いた名前となる 指向作用によって満たされる

89 *** 肖像画の形象**

90 固有名詞と肖像画の間には、固有のものをその形象から引き離す完全な差異がある：肖像画は形象・文彩で、形象は非固有のものであるが、類似によって固有性を模倣している

肖像画は固有性の換喩的隠喩

*** 肖像画の開封**

名前は肖像画のXの名前であるが、Xの肖像画は形象・文彩である

91 名前は肖像画のモデルの名前であるから、肖像画の起源であり、起源の肖像画が文彩となる

名前を記入することは、肖像画の換喩的隠喩を書くことである

92 タブローに書かれた名前は、消えてゆくモデルの消滅の痕跡で、描かれた形象はこの名前の死骸である

*** 文字への回帰あるいは P・クレーの墓標**

94 ex. 『R 荘』

95 R という文字は意味しないが記号をなしている：視線、無に対しての記号

文字は再現作用の終結をしるす

96 文字がタブローにある不可視のものを浮上させる時から、絵画的スペクタクルの可視性は完全なものであることをやめる

94 記入された文字は、ある動作の痕跡であり、その沈黙した効果の恒常性、不動の反復である